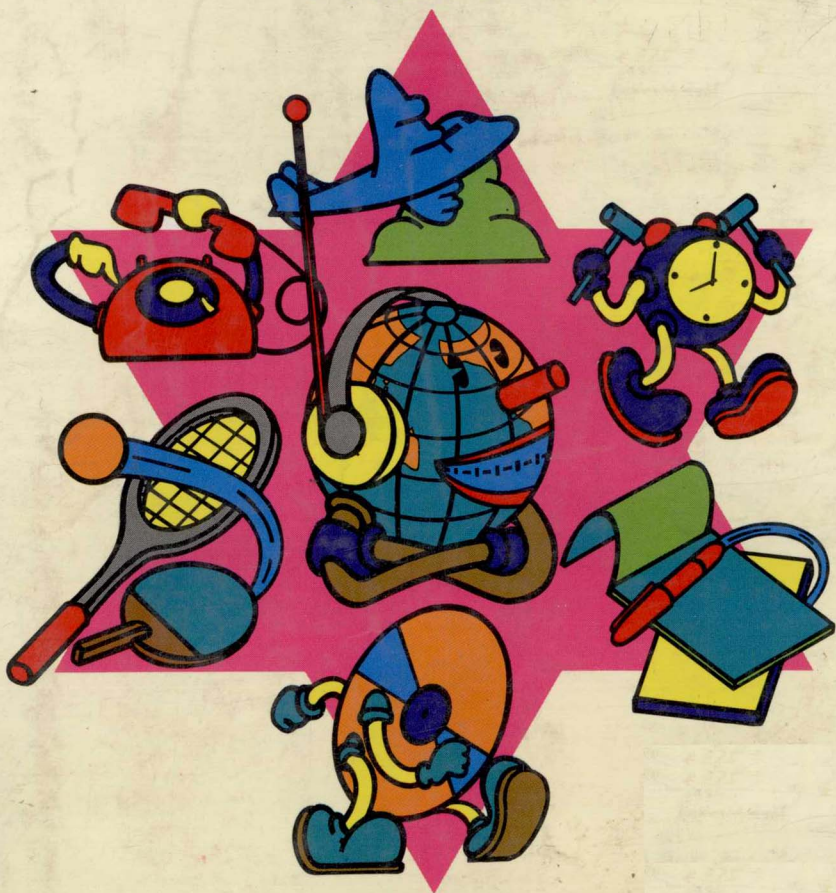


何でもわかる

国語表現ハンドブック

平井昌夫＝著

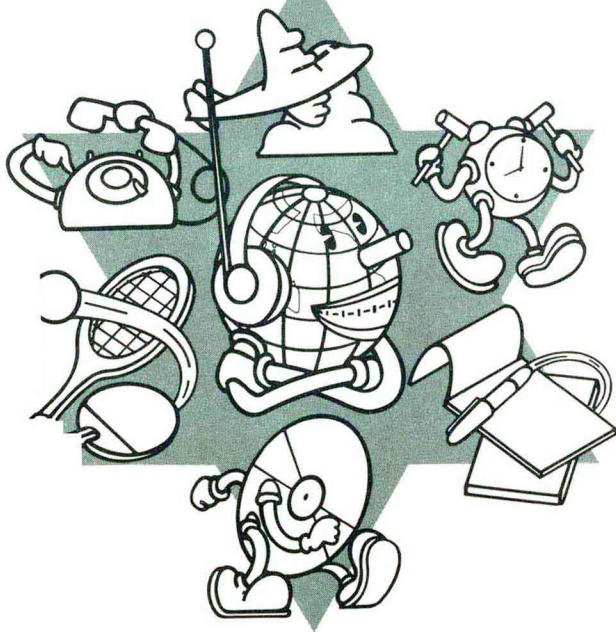


三省堂

何でもわかる

国語表現ハンドブック

平井昌夫 著



三省堂

何でもわかる

新国語ハンドブック

平井昌夫著 576ページ・950円

- 読み・書き・話し・聞くという中学校で学習すべき内容をすべて採り上げた国語学習のエッセンス集です。
- 姉妹編としてご利用ください。



何でもわかる

国語表現ハンドブック

定価 950 円

1983 年 5 月 10 日 第 1 刷発行

©

著 者 平井 昌夫

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

発行所 株式会社 三省堂

〒101 東京都千代田区三崎町二丁目 22 番 14 号

電 話 編 集 (03) 230-9411

販 売 (03) 230-9412

総 務 (03) 230-9511

振替口座 東京 6-54300

〈国語表現ハンド・368 pp.〉 N.D.C. 番号 910

落丁本・乱丁本はお取替えいたします Printed in Japan

まえがき

『国語表現ハンドブック』は、中学校で教える作文だけでなく、広く文章表現法のあらゆる問題を、具体的な実例とともに、細かく取り上げ、詳しく述べたものです。国語表現の本格的な案内書として、みなさんの役にたつことを願って述べてあります。

作文という用語は学校教育だけに用いられていますので、本書では、それを土台として、広く大きく展開し、社会で一般に用いるものへと進めました。それだけに、学習の範囲も広くなりました。

学校では、作文というと、完成した文章を書かせるというテスト形式の方法が今もって盛んです。文章を書く基礎的な能力を伸ばす練習がたいせつなのに、そのことがほとんど忘れられています。本書はその点に大きく力点を置いて述べてあります。

作文は文字言語を使って行う表現活動でありますのに、文字言語の基礎となる語彙^{ごい}を広げること、これまでほとんど取り上げられてはいません。本書はその点にも注意を払ってあります。

文章を表現するには、その目的に応じて、描写するとか説明するとかといった述べ方が違います。その表現の違いを具体的に述べなければ、文章は具体的に書けるものではありません。実際の作文をよく読んでみますと、どれも感想文めいた書き方が多いのがわかります。議論めいたことが書いてあっても、つまりは感想文になってしまっています。

本書の特色の一つは、いろいろな社会の人たちの文章を実例に挙げてある点です。また、Ⅲのところ有名な文学者のよくない実例を数多く挙げてありますのは、文学者でも誤りをするものだということを示したかったからでもあるのです。なお、文章表現の重要な用語については、必要に応じて定義ふうの解説をつけてあります。

あるテレビの番組で、思いきって買ったことを、「シミズ（清水）の舞台から飛び降りたつもりで買いました。」と言っていました。正しくはキヨミズ（京都の清水寺のこと）と読むべきです。さっそく新聞や週刊誌の投書で非難されていました。

“神戸”と書いてあっても、コウベ・ゴウド・カンベなどと土地によって読み方が違うのですから、固有名詞の読みはやっかいなことです。したがって、“清水”と書いてキヨミズと読ませるのは、だれにでも要求できないことでしょう。しかし、放送でまちがえたのでは、前もって調べておかないという非難が出されるのも当然です。

ところで、わたしの言いたいのは、今どきこんな旧式なたとえをなぜ使うかということです。“清水”の舞台と言っても、若い多くの人たちには実感がわきません。ある新聞への投書者は、「東京タワーから……」とでも言ったほうが適切かもしれない、と述べていました。

すっかり古くなって、実感も浮かばなければ、われわれの生活からも縁遠くなってしまったたとえを、今でも平然と使っている人が多いのに驚きます。

相撲すもうの放送で「鎧袖一触がいゆいっしゅく」などと言っていました。選挙のニュース放送で「中原の鹿を射る」などと言っていました。その当選者の祝賀会のあいさつでは、「粉骨碎身」です。野球の解説者は「△△チーム、ここ

らでフンドシのヒモをしめなおすべきだ。」と無神経に述べていました。言語をたいせつにする小説家までが「ケツの穴が小さい」と書くしまつです。こうなると、古くて紋切り型の表現というだけでなく、言語の美しさを考えない表現ということになります。

こうした実例と似合ったものをⅢで数多く挙げてありますのは、それが社会では案外多いということを示したかったからです。つまりは文章を苦心して書くことを学校時代にしていなかったのです。本書はそうした点でもお役にたつことを願っております。

一九八三年三月一五日

平井昌夫

目 次

I 文

一 作文の学習の目標と学習法……………(2)

日 作文とは何か……………(2)

(一) 作文の意味……………(2)

(二) 作文の特徴……………(3)

日 作文の学習……………(5)

(一) 作文の学習はやっぱり……………(5)

(二) 作文の学習の特色……………(8)

(三) 作文の学習の目標……………(9)

日 作文の学習法……………(11)

(一) 見本法……………(12)

(二) 実習法……………(13)

(三) 総合法……………(14)

二 作文の学習計画……………(24)

日 表現意欲を高める学習計画……………(25)

日 内容を豊かにする学習計画……………(28)

(一) 経験を求める学習……………(29)

(二) 考える力を伸ばす学習……………(30)

日 内容をまとめる力を伸ばす学習計画……………(32)

日 言語表現の技能を伸ばす学習計画……………(37)

日 文章を書く学習計画……………(40)

日 文章を書いたあとの処理の学習計画……………(45)

(一) 文章の処理……………(45)

(二) 推考……………(47)

三 語彙を広げる計画と具体的な方法……………(50)

日 語彙を広げる計画……………(50)

(一) 語彙学習の問題点……………(50)

(二) 新出語彙についての学習……………(55)

(三) ささまざまな語彙学習……………(57)

II 文章を書くこと

㊦ 語彙習得の具体的な方法と練習の種類……………(62) (一) 語彙習得の具体的な方法……………(62)	一 構想・話題・主題・題……………(76) ㊦ 文章の書き方を知ること……………(76) ㊦ 構想……………(77) ㊦ 話題……………(83) ㊦ 主題……………(92) (一) 主題は文章の中心思想……………(92) (二) 文学作品には主題がありますか……………(101) ㊦ 題名……………(103)	二 取材……………(106) ㊦ 文章を書くには材料が必要……………(106) ㊦ 取材のしかた……………(110) 三 いろいろな述べ方……………(115)
(二) 語彙学習の練習の種類……………(70) (一) 知らない単語の処理……………(73)	㊦ 感想の述べ方……………(116) ㊦ 描写する述べ方……………(118) ㊦ 説明する述べ方……………(126) ㊦ 説得する述べ方……………(132) ㊦ 語りかける述べ方……………(133) ㊦ 要約する述べ方……………(135) ㊦ 議論する述べ方……………(137) ㊦ 強調のしかた……………(139)	四 あら筋の作り方と文章の完成……………(141) ㊦ あら筋の作り方……………(141) ㊦ 文章の完成……………(146)

III 文字・単語・文・段落の書き方

一 文字の使い方

..... (156)

㊦ 文字を書くこと

..... (156)

㊧ 漢字の正しい使い方

..... (161)

㊨ 文字のよくない使い方

..... (166)

(一) きまりを無視した使い方

..... (166)

(二) 気どった使い方の漢字

..... (170)

(三) 書き手が気ままに使う漢字

..... (172)

㊩ よくない表記

..... (173)

(一) 列挙する書き方がまちまち

..... (174)

(二) 改行のしかたがまちまち

..... (175)

(三) てんの使い方がまちまち

..... (177)

㊪ 文の終わりの示し方がまちまち

..... (179)

二 単語の選び方

..... (182)

㊦ 単語の正しい選び方

..... (182)

㊧ 単語のよくない使い方

..... (193)

(一) 一つの文の中で同じ単語を使いすぎる

..... (193)

三 文の作り方

..... (206)

㊦ 文とは何か

..... (206)

㊧ 主語と述語と文節

..... (209)

(一) 主語

..... (209)

(二) 述語

..... (211)

(三) 文節

..... (211)

㊨ 文の種類

..... (213)

㊩ 文を書く要件

..... (215)

㊪ いろいろな悪文

..... (220)

(一) 二つ以上の考えが入っている文

..... (220)

(二) 敬語の誤り

..... (195)

(三) 能動と受動との混用

..... (196)

(四) 呼応する語句が見当たらないこと

..... (196)

(五) 文脈に合わない単語

..... (197)

(六) 絞切り型の単語

..... (198)

(七) 抽象的な単語

..... (199)

(八) 難しすぎる単語

..... (204)

IV

いろいろな書き方

一	書き初めと書き終わり	(250)
二	書き初め	(250)
三	書き終わり	(254)
二	新聞・文集・雑誌の作り方	(261)
四	編集のしかた	(261)
五	新聞記事	(262)
六	新聞の読み方	(264)

四

段落の作り方

(一)	主述が対応していない文	(221)
(二)	主語がなくて意味が曖昧な文	(222)
(三)	ごたごたしている文	(223)
(四)	長すぎる文	(225)
(五)	語句の照応がはっきりしない文	(226)
(六)	必要な語句が入っていない文	(228)
(七)	よけいな語句が入っている文	(229)
四	段落の作り方	(231)

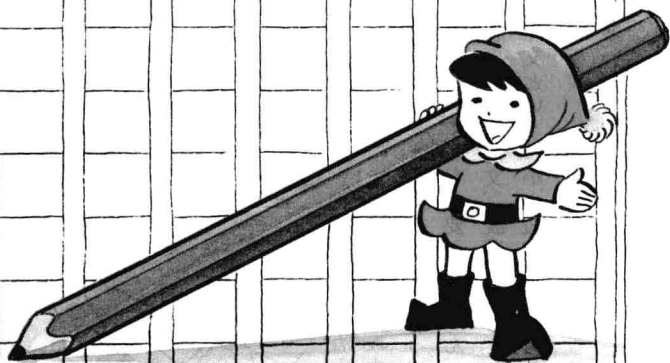
四	段落とは何か	(231)
(一)	段落の意味	(231)
(二)	よい段落	(236)
三	段落のよくない作り方	(243)
(一)	段落なしの文章	(243)
(二)	段落表示の形式が守られていない段落	(246)
(三)	段落の中の文の並び方が不自然	(247)
三	いろいろな文章	(275)
四	文集や雑誌の作り方と利用のしかた	(270)
(一)	必要な項目を速く探し出す技能	(264)
(二)	要領よく速く読む技能	(267)
(三)	効果的に読む技能	(267)
(四)	批判的に読む技能	(268)
三	読書メモの書き方	(275)
四	記録文の書き方	(277)

三	簡条書きのしかた	(280)
四	ポスターの書き方	(281)
五	揭示文の書き方	(282)
六	指図文の書き方	(283)
七	日記の書き方	(284)
八	報告文の書き方	(285)
九	感想文・生活文の書き方	(286)
一〇	評語の書き方	(288)
一一	論文の書き方	(292)
四	手紙の書き方	(295)
一二	手紙のエチケット	(295)
一三	社交の手紙の形式と用語	(299)
一四	封筒の書き方	(307)
一五	はがきの書き方	(308)
一六	いろいろな手紙を書く要領	(311)
一七	実務の手紙	(311)
一八	電報文の書き方	(313)

五	原稿用紙やペンの使い方	(316)
一	原稿用紙の種類	(316)
二	原稿用紙の書き方	(318)
三	ペンの選び方と持ち方	(321)
四	ペン習字	(323)
六	符号の使い方	(326)
一	くぎり符号	(326)
二	くぎり符号の使い方	(328)
三	繰り返し符号の使い方	(332)
七	いろいろな作品	(334)
一	子どもの作文	(334)
二	感想文	(338)
三	新聞記者の短評欄	(341)
四	はがき通信	(345)
〔付録〕	送り仮名の付け方	(347)
索引		(354)

I
作

文



一 作文の学習の目標と学習法

一 作文とは何か

(一) 作文の意味

作文の定義

学校教育では、以前は作文よりも「つづり方」という用語が一般的でした。つづり方という用語は「文字をつづる」すなわち文字を並べるといふ意味が強いので、作文という用語に代わってきました。また、英語などで単語のスペリングを「つづり」と言ったりしますので、つづり方という用語がすたれてきたのでしょう。さらにまた、読み方、話し方というように方法の意味が強いことも、つづり方と呼ぶと旧式だと思わせるので、作文が使われるようになったのでしょう。

作文は、何か一つの事がらについて、ある長さのまとまりのある文章を作ること、またその「書かれたもの」をいいます。「書かれたもの」についていえば、いわば習作文ともいふべきものです。他の創作文すなわち小説・戯曲・シナリオなどのように特別な組み立てや形や方法は持たないし、また論文などのように精密な証拠立てや証明を必ずしも必要としません。主としてふつうの叙事文、叙情文、説明文などとして書かれた文章を作文というのが一般的です。したがって、記事文、随筆文、評論文、手紙文、日記文などであることが多いのです。



この意味での“作文”という名称は、比較的気楽な立場で個人的に何か“もの”を書くときにも用いられます。しかし、学校教育の場面では、国語科の一分野として、“習字”(文字を書くこと)とともに“書くこと”の学習の一項目です。こうして、子どもが書いた作品を“作文”というばかりか、文章を實際に作る学習、文章の種類や形態や修飾の知識、文章を書くときのさまざまなきまりの学習、作文教育などをもひっくるめた用語になってきました。

作文の指導

作文指導の立場も、形式主義(ある形式に即して模範的な文章を書くこと)、自由主義(表現したいと思うことを自由に書くこと)、写生主義(事実をありのままに叙述すること)、生活主義(生活そのものを探究するために生活報告文を書くこと)などさまざまな変化がありました。現在では、学校で学習することになっている作文は、実生活のさまざまな場面で文章を書くことの指導がなされる教科となっています。すなわち、小説などをたいせつにみる文芸主義的なものではなくなっています。そして、

文章論や修辭学を重くみる文学教育における作文と言語教育における作文とを区別し、いかに巧みに表現するよりも、どのようにして正しく伝達するかに主眼を置くようになっていきます。

(二) 作文の特質

作文の目標

作文の学習の一般目標は、これまでとは、個性のある表現が書けるようになるといった考えや、作文の学習を通じてみなさんの生活指導をめざすといった傾向がないではなかったのです。すなわち、前者のばあいは特別の才能を持つみなさんだけを伸ばすことに指導の力点が置かれやすく、いきおい優秀児目当ての努力と新聞や雑誌などに発表することへの関心とが重んぜられました。

また後者については、現在でも生活指導の手掛かりが、みなさんの作文から得られることはもちろんですけれども、生活指導の内容的な方面は多く社会科にゆずられ、一般的な方面はいわゆるガイダンス

として広く取り上げられるようになりました。したがって、国語教育の立場では、作文の学習の一般目標は、読む相手が正しく理解してくれるように自分の言おうとすることを正しく効果的に表現できる能力をすべてのみなさんに着けることです。

そのために、作文の学習における学年目標が設けられており、その学年目標を設定する一般的なものが三つあります。

- (1) 社会生活から要求される作る能力
- (2) 身心の発達に応じた作る能力
- (3) 作る能力が伸ばされる学習活動

この三つの要素を分析し、その分析に基づいてさまざまな組み合わせを行い、それによって各学年の作文の範囲と学年系列とが確定されてくるわけです。

原則的な言い方をしますと、文章を書く力は話す力が発達するにつれて伸びていくものです。文章を書く力と話す力とはどちらも同一の言葉の表現能力が表現手段の相違によって違った形で現れるだけの

ものです。したがって、作文の学習計画を立てるばあいでも、文章を実際に書くばあいでも、この関係を基礎においてなされなければなりません。

そこで、まず話すことと文章を書くこととの相互関係を考えてみます。

話し方と作文

話すことと文章を書くこととは本質的には同じです。文の構造、考

えの組み立てや順序、使用する語彙、どれも両者に共通です。ただそれらが、一方は音声言語、他方は文字言語であるという条件の違いによって、表現の技術的な方法に違いが出てくるだけです。すなわち、話すばあいには、発音、声の調節、姿勢、話すときの態度などが技術的な方法になります。文章を書くばあいには、文字の書き方、文章を書く一般的な約束（新しい段落の最初の行を一字下げること、句読法な



ど、仮名遣い、漢字と仮名の使い分けなどです。だから、話す力を伸ばすための本質的な練習も文章を書く力を伸ばすための本質的な練習も同じですが、その技術的な手段の修得はいちおう区別されなければなりません。

それにもかかわらず、話すことと文章を書くことが一見別のもののように考えられやすいのも、もう一つの性質があるからです。もう一つの性質とは時間性のことです。話のばあいには、聞き手が直接に存在しているために時間の使い方に制限があり、一回きりになってしまつて、あとでの訂正ができません。これに反して文章を書くばあいには、読み手は間接に存在しているために時間の使い方が自由で、何回でも繰り返して訂正ができます。話では、繰り返して訂正ができない代わりに、話す場面の雰囲気とか身ぶりとか手ぶりとかを利用して自分の考えをいっそう効果的に表現できるという利点があります。文章を書くばあいには、そのような補助手段を活用できない代わりに、いったん書いた文章を何

度も練り直したり、少しずつ書き直しをしたりしながらまとめ、できるだけ正確で効果的なものに仕上げていくことができるという利点があります。

このように、表現の技術あるいは方法の点ではいちおう区別があつても、話すことの本質的な過程も文章を書くことの本質的な過程も実は全く別なものではなく、どれも考える過程にすぎないのです。

二 作文の学習

(一) 作文の学習はやっぱり

作文の学習は困難

① 作文の学習は作品生産の仕事だけではありません。

読むことの学習の目標が文字の読みだけでなくことは一般的に認められてきましたが、学力低下をまねくという問題がおきますと、漢字の読み書きがひどく重大に取り上げられる傾向があります。これと同じように、作文の学習の目標が

文字言語を手段とする表現の能力と表現の技能とを
 発達させることです。それなのに、「書け、書け！」
 の掛け声で、やみくもに作品の生産に追われてしま
 い、あわよくば作文コンクールや読書感想文の募集
 をに応募して、入賞をねらう傾向が現れています。
 これは、作文の正しい姿とは言えません。

国語の力は、大きく分けますと、理解力と表現力
 になります。受容力と発表力というふうにも分け
 らます。表現力は、主として音声言語を手段にする
 ばあいと、主として文字言語を手段にするばあいと
 によって、表現技術なり表現作法なりの点で相違し
 てきます。「思ったとおりに書きなさい！」と言っ
 ても、思ったとおり書けなかったり、頭で考えがま
 とまってもいざペンを取ると思いがけない文章がで
 きてしまうのも、思想として頭でまとめることと言
 語表現としてまとめることとがいちおう別な働きで
 あることと、音声言語か文字言語かの手段の選び方
 で表現の結果が違ふこととの二つがあるからです。
 したがって、作文の学習の目標は、次の三つに大

別されます。

- (1) 書こうとする内容を豊かに持つ。
 - (2) 書こうとする内容を言語表現のためにまとめる。
 - (3) まとめたものを具体的に文字言語化させる。
- すぐに作品を作ろうとするのは、この三つのうちの
 (3)だけを強く取り上げようとするものです。
- ㊦ 作文はいちばん難しい言語活動です。

普通人の日常の言語生活では、言語の働きがよく
 行われるのは、①聞くこと、②話すこと、③読むこ
 と、④書くことの順序です。これはまた、われわれ
 が言語を用いるときのやさしさの順序でもあります。
 書くことがいちばん少なく、いちばん困難です。
 語彙の習得を例にとっても、このことは事実で
 す。普通人の語彙では、①聞く語彙、②読む語彙、
 ③話す語彙、④書く語彙の順序で習得が少なくなり

